

「定年退職学」のすすめ

— 共創的悠々自適をめざして —

田口 奉童

名古屋市立大学 22 世紀研究所 特任教授

概要

定年退職は、悠々自適なライフステージの始まりである、というのは一般常識であろう。ところが、筆者自身の実体験では、定年退職して孫の育児（「イクジイ」ⁱⁱと呼ぶ）に直面し、予定していた悠々自適は、常識を覆し、崩れ去った。

衝撃を受けた筆者は、周りの定年退職した人々にヒアリングやアンケートを行い、イクジイの実態調査と考察を試みる。その結果、悠々自適には、孤立的な「独創的」悠々自適と、協調的で満足度の高い「共創的」悠々自適が存在するとの仮説に到達する。両者の関係は、「共創＝独創＋5K」と表すことができるとし、「独創的」悠々自適を、「共創的」に補正するよう、5K（5つの要因）のバランスを取りながら、5Kそれぞれとの共創（採り入れと調整）を不断に行うべきだと主張する。

定年退職に関する多くの文献はあるが、いずれかの分野に偏っているのが現状なので、上記 5 要因全体を体系的に包括する「定年退職学」として確立し、発展させる必要があるのではないだろうか。

1. はじめに

悠々自適とはその人の、何もしないことを含め、ひとつ一つの行動の集合であり、それらは日課に集約される。筆者も定年退職した後、健康で、経済・社会分野の研究ⁱⁱⁱや、趣味などを存分に楽しむ悠々自適の活動を組み入れた日課を作った。だが1年ほどで一変した。娘と孫との同居が始まり、我々夫婦はイクジイ・イクバア（以下イクジイとのみ表す）の役回りを余儀なくされたからである。

本稿では、第 1 に、悠々自適の日課を紹介し、第 2 に、イクジイの背景や奮戦ぶりを詳しく述べつつ課題を浮き彫りにする。そして第 3 に、他の事例を参照しつつ、あらためて定年退職の意味を考え、様々な悠々自適の日課が存在する実態を明らかにする。

そこで、筆者は、「独創的」悠々自適と「共創的」悠々自適という概念を持ち込み（仮説を立て）、その二つを両極として、両者の間にすべての日課を包摂する。

まず、独創的悠々自適を共創的悠々自適に補正する第 1 歩は、退職したら家庭（家族）に復帰（共創）することであると、社会生活基本調査の考えを参考にして、理解する。その上で、家庭以外の共創すべき要因も考案し得るので、ならば「定年退職学」なるものの

確立が有益だろうと結論づける。

本稿の作成に当たっては、当研究所特任教授の守誠氏（副所長）、中川十郎氏、岡本博之氏から関東部会においてご示唆を頂き、さらに、古屋邦彦氏（元九州国際大学教授）と内藤徹雄氏（元共栄大学副学長）からアドバイスと激励を得て事例研究を進めることができた。各氏に謝意を表したい。但し、本稿の内容、誤りなどの責任は全て筆者にある。

2. 事例研究—筆者の実体験と他の事例

2-1) 悠々自適のスタート

筆者は、2000 年度より京都にある私立大学に専任教員として勤務、2010 年度に 65 歳で嘱託（特任）教授となり、2015 年 3 月末に満 70 歳で定年退職した。そして、あれこれ考えて図表 1 のような、悠々自適の日課をスタートさせた。本稿では、職場から完全に離れた満 70 歳の時点を定年退職と捉える。

悠々自適の活動の基本は、①健康のため、1 日 8,000 歩のウォーキングをする、②3, 4 つの学会所属を継続し、それらの全国大会にはできるだけ参加する、③新聞・機関誌などへ年数回投稿する、④趣味の落語を楽しむ、である。これらを踏まえて、2016 年 7 月の時点で、完成したものである。

2-2) 悠々自適の崩壊

2016 年 8 月 7 日（日）の夜に、長女と孫（図表 2）が我が家に引っ越してきて、（悠々）自適の日課（図表 1 左欄）はイクジイの日課（同 右欄育児の日課）に急転した。その理由

図表1 悠々自適の日課と育児(イクジイ)の日課の比較

時刻	自適の日課(7月以前)	育児の日課(8月以降)
6時	6:30 起床	6:30起床
7	ウォーキング朝	おむつ取り替え、着替え
8	朝食	孫の朝食、その後朝食、
9	TV報道番組、外出A	見守り・付き添い・遊び相手
10	朝日新聞	(歌、本、TVビデオなど)
11	日経新聞	おむつ取り替え
12	ネット、読書	孫の昼食、その後昼食、
13	昼食、 外出B	孫の昼寝の間に新聞
14	TV報道番組	見守り・付き添い・遊び相手
15	ネット、読書	同上
16	ウォーキング夕方	同上
17	外出C	同上
18	新聞	同上
19	風呂掃除	孫の夕食、その後夕食
20	夕食	見守り、遊び相手
21	TV報道番組	孫の入浴
22	入浴	孫の添い寝
23	23:30 就寝	新聞、ネット、PC、ラジオ
24		就寝

出所:筆者作成 (注)外出A-Cは曜日などにより変わる

は、長女が 7 月に産科医師から、不妊治療が実り妊娠 4 週目と告げられ、つわりがひどく嘔吐や出血を繰り返していたことから、絶対安静の厳命が下されたためである^{iv}。我々が引き取る以外に選択肢はない。我が家は、長女らが住むマンションから車で 10 分程の近くにあり、1 階に居間 (16 畳)、和室 (8 畳)、台所、風呂があり、2 階に洋室 4 室を有する。その和室に長女と孫が寝起きすることになった。居間は、おむつ交換や昼

寝用の布団とおもちゃ類の箱が陣取りすっかり子供部屋に模様替えした。さらに居間の、テレビや食卓テーブルの前の、最近購入したばかりのわが憩いのソファの席は、同居人の

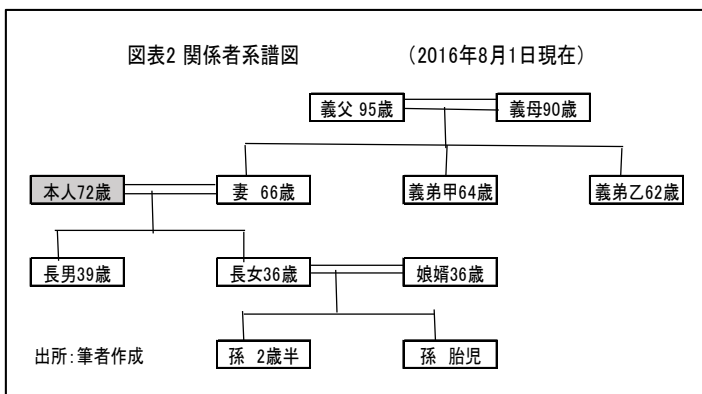
長女と週末に現れる娘婿に譲り、本人も妻もその周りに臨時に配置した補助椅子に座った。週に数日夕食に来る長男はひとり別のテーブルに追いやられた。

育児の日課は、図表 1 右欄の通り、孫は絶対君主の様である。孫の日課に対応するのは本来母である長女だが、絶対安静を命ぜられ、やせ細り、腹部を手で押さえ前屈姿勢で伝い歩きしている。そんな身体に任せる訳にはいかない。妻も炊事・洗濯・買い物で忙しく動き回っている、本人が孫の最前線に押し出される。

孫の起床は 6 時半ごろと早く、和室から居間に出てくるので、遅れることなく迎えなければならない。最初の日課はおむつ交換と着替えであるが、孫は逃げ回り手を焼く。ご機嫌を損ねたらもっと大変になる。孫のほかの行動も独りでできるものはないので、常に本人が、孫の意向に沿うよう、助け、相手をし、見守らなければならない。

2-3) 関係当事者

ここで本人を取り巻く主な関係当事者を系譜図（図表 2）で示し、個別に若干の説明を加えよう。なお、名称はすべて系譜図のものを使う。



本人は、筆者で鎌倉市の住民である。妻は、専業主婦、我が家の大黒柱で、家事全般のほか義父母のケアの最前線に立ち、超多忙の毎日を送っている。時に体調を崩すのが心配である。

義父は、本人の家から車で 10 分ほどにあるサービス付高齢者住宅で暮らす。要介護度 3 で、認知症が進んでいる。義母は要支援 1 で同じ施設（別室）に居て、食事など義父を助けている。施設には、妻が週に 2, 3 度、本人は月 2, 3 度訪問する。

義弟甲・乙ともに神奈川県内に住み、義父母の施設には 1 時間ほどで着く。月 1, 2 度義父母を訪問している。

娘婿は、東証一部上場企業に勤務。平日の帰宅は午後 10 時ごろで休日出勤もたまにある。出勤しない休日には、午後から本人宅に来て孫の育児を担う。そのため、本人にとって、土日の午後が待ち遠しい。

長男は地方銀行に勤務、まだ独り身。婚活の一環として、2016 年 5 月本人宅から徒歩 10 分にマンションを購入、一応独立させた。

孫 2 歳半（女兒）は、本人の育児の対象者である。比較的小柄の身長 86cm、体重 12.6kg。2 つの単語をつないだ会話ができる。性格は快活で、よく食べ、病氣しない。しかし、一旦機嫌をそこねると、1 時間ほど泣きわめき、手が付けられない状態になる。そうならないよう常に心している。寝つき・寝起きともに悪い。

孫（胎児）は長女の第 2 子、出産予定は 2017 年 3 月下旬。

2-4) イクジイの課題

本人の実体験からつぎのような課題や問題点が浮き彫りになった。

① 健康の不安

長女と孫娘を引き取った 8 月の上旬ごろ本人宅の家族は軒並み体調を崩していた。まず本人は、7 月 27 日名古屋に出張中に突如、一過性全健忘^{vii}を患い当夜は名古屋市立大学医学部附属病院の救急で過ごした。さらに 8 月 5 日急に 38 度の発熱、翌 6 日（土）夜、体温が下がらず、救急を受診した。その 1 か月ほど前の 7 月 6 日に 2 歳上の実兄をすい臓がんで亡くして憔悴していたところでもあった。

長男も殆ど病気をしないのに、7 月 25 日から肺炎と診断され欠勤、8 月 1 日より 1 週間本人宅での療養に切り替えた。

これで本人宅では、本人と長男の二人の病人を妻一人が支え、絶対安静を求められた長女と孫の面倒を見なければならない厳しい事態となった。彼女も 1 か月ほど前に体調を崩しておりまだ万全とは言えない状態であった。

このような時に、長女たちを迎えたのである。恐怖に近い不安にさいなまれ、始まった不慣れな育児で、傍らで見ただけの長女が、本人の不手際を指摘した時、「こっちは命をすり減らしてやっている。わかっているのか」という趣旨の言葉をつい吐いてしまったことがあった。

本人の体重は以前 67kg を超えていたが、イクジイ開始直後 64kg に減っていた。この身体で 13 kg ほどの孫は重かった。

② 日課の葛藤

本人の日課は、前掲の図表 1 の通り、孫の育児の開始とともに一変した。育児は、余念を持ち、中途半端な気持ちではとてもやれないと自覚したからである。邪念を捨て、気持ちを込めて、全身全霊で取り組まないと務まらないということを何かで読んだことがある。確かに、育児の日課は、時間通りに進むものは皆無で、大雑把な目途に過ぎない。とても外部の人と約束はできない。

目の前で、長女がやせ細り、2 歳半の孫を抱えて困難の極みに居る。待ったなしの状況で放っておけない。手を差し伸べるべきは、また今それが出来るのは、この世の中に本人と妻の二人しかいない。それが家族^{viii}というもので、最後のより辺であり、ラスト・リゾートである。そう心の中で繰り返した。

他方、本人は既に古稀を過ぎている。元の職場の知己、同級生の訃報もしばしば届くこの頃である。余命はあと何年か、体はいつまで元気だろうか、カウントダウンが始まっており、人生をエンジョイするのなら、急がなければ手遅れになってしまうという焦燥感が膨らむ。

日課の葛藤の結果、自適の日課をことごとく取り下げた。外出 A の市民教養講座にキャ

ンセルの決意を伝えた時、事情を聞き終わった主催者事務局の年配の女性が「田口さん、それも人生ですよ」と慰めてくれた時、胸に熱いものが込み上げてきた。外出 B の趣味の会などにも「1 年程長期欠席」を申し出て、外出 C の寄席や不定期の会合など全ての「家外活動」を来年秋ごろまで封印した。

③ 役割分担の問題

孫の育児は、長女が病人同様であるため、本人が、朝から晩まで、着替え・おむつ取り替え・食事・遊び・見守り・入浴・添い寝などで最前線に立ち、妻が調理・洗濯などの後方支援を主に担当した。排泄処理は三人がかりなどその場で柔軟に協力もした。

その中で二つの問題を意識した。一つは、妻の分担が休みなく続くことである。本人は、通常なら土日の午後は娘婿が来てくれるため息抜きができる。だが妻には短時間でも交代要員がない。二つは、長女が夜は孫を引取り同室で眠ることである。孫は夜中 2, 3 度目を覚まし移動もするらしく、長女が十分に休眠（安静に）できていないことである。それらの課題は、本人の頭から離れることはなかった。

④ 適性の疑問

私本人は、正直、感情的な人間で、短気な性分である。加えて、育児の経験もない。こんな高齢者が育児をやれるのか、そんな不安に包まれていた。育児の相手は 2 歳半、それは、「テリブルツゥ」^{viii}と言われ、何でも自分でやりたがる、自己主張が強くなり、そしてイヤ、イヤを繰り返す反抗期といわれる年齢で、難しく手ごわいことこの上なし。

案の定、私本人の健康に不安を抱えていた時期（2016 年 8 月当時）のせいか、こちらの思うとおりに動いてくれない孫が相手のためか、感情を抑えきれず声高になったり、もう、止め！と作業を投げ出したりしたことがある。大人として、良い歳の男が、なんで鷹揚さや心の広さが無いのかとよくため息をついた。こんな時、私を救ってくれたのは、その数分後、まるで何事もなかったような孫の屈託のない笑顔である。

因みに、「育児はエンターテイメント」と表現した新聞の投書を目にした。投稿者は二人の男児の父親で、育児は面白く楽しいと言い切る。ネットでも「育児は人生最大のエンターテイメント、笑いあり涙あり」との意見が出ている。確かに、子供の一言や所作に捧腹することがよくある。しかし、それは一面に過ぎない。私本人は、逆に、育児を上手くやるためには、まずこちらがエンターテイナーに成り下がりご機嫌取りをすること、また駄々をこね始めた時に、先にエンターテイメントを仕掛けて、事態悪化を回避することが上手い育児のコツだと思っている。

2-5) ヒアリングとアンケート

他の人達は、イクジイの悩みを、どうしているのか気にかかり、ヒアリングとアンケートをした。すると、多くの同世代の人々も、私同様に、似たような問題意識を持っていることが見えた。

① ヒアリング

親しい学友や町内の隣人から、電話や立ち話を通し得たヒアリング情報を整理し一覧表

にまとめてみた (図表 3)。この調査から導かれる結論は、①イクジイ体験の事例は広範であること、つまりイクジイを取り入れた悠々自適は一般化していること、そして、②孫を持つ娘が車で 30 分以内に住むとその娘の親がイクジイ (ここではイクバア) になる可能性が高い、母娘の連携の強さがうかがえる、などである。

図表3 イクジイ・イクバアに関するヒアリング結果(実施 2016年7月~9月、対象者はほぼ筆者と同年齢)

No.	対象者	性別	イクジイ・バアの体験	孫の住まい	いずれの孫	孫の育児の内容
1	本人の友人1	男	なし	遠距離	息子孫2人	
2	本人の友人2	男	(今は)なし	遠距離	なし(娘)	(娘が2016年に結婚)
3	妻の友人1	女	あり	車で10分	娘	時折保育園送り迎え、見守り
4	妻の友人2	女	あり	近く	娘	保育園送り迎え、来訪・食事・風呂
5	妻の友人3	女	あり	電車1時間	娘	出産時手伝い、頻繁に来訪・宿泊
6	近所の奥さん1	女	あり	車で30分	娘2人孫4人	来訪、見守り、病気看病、
7	近所の奥さん2	女	あり	遠距離	息子	初~3孫出産時1週間ほど支援
8	近所の奥さん3	女	あり	車で1時間	娘3人孫8人	来訪、見守り、病気看病、
9	近所の主人1	男	始まりそう	車で1時間	娘	2016年12月15日初孫出産

出所:筆者作成

② アンケート

高校の同級会を活用して、アンケートに協力してもらった。その結果 (図表 4) おもな

図表4 イクジイ・イクバアに関するアンケート調査結果

イクジイ・イクバアの体験	あり	8	なし	4
育児の対象は	息子の孫	5	娘の孫	3
育児の期間	1年以内	4	3年以上	3
育児のタイプ	同居丸抱え	0	駆け付け支援	7
孫の住まいは	車で1時間以内	5	車で1時間超	3
自分の余暇との両立	育児優先	楽しかった		1
	育児優先	バテ気味		1
	バランス良く	皆満足		1
	余暇優先	合間に育児		1
	余暇優先	育児時間なし		1
息子・娘への注文	感謝や礼節			2
	限度をわきまえる			2
	何もなし			3

アンケート実施:2016年11月12日高校同級会 対象17名 回収15件 有効12件

特徴は、①孫を持つ人は殆どがイクジイを経験していること、②育児と自分の余暇とのバランスでは、育児優先から余暇優先まで多様に拡散していること、③イクジイ体験後の評価は様々で

あること、③イクジイの中で、息子・娘の態度に一言注文を付けたいと思っている人が少ないことなどである。

3. 考察—イクジイと定年退職

本章では、悠々自適の暮らしは、毎日の行動であり、日課に集約されるので、日課に焦点を当てる。また、前章で定年退職者である本人のイクジイ実体験から、健康、日課、適性、役割分担が課題として抽出されたが、最も強い衝撃を受けたのも日課の問題であった。

その上で、総務省の社会生活基本調査の概念を取り入れ、定年退職後の悠々自適の日課を論じる。本人の実体験・ヒアリング・アンケートに照らすと、悠々自適の実態は、育児の側面だけでも、多様に拡散している。評価もそうだ。各人各様な日課があって当然だとは思いますが、筆者が注目するのは、(後述の通り)「独創的悠々自適」を補正して「共創的悠々自適」に進化しているか、どうかである。

3-1) 日課の葛藤—定年退職のイメージと活動のギャップ

私が直面した最大の課題は、悠々自適とイクジイの二つの日課の葛藤であった。定年

退職とは悠々自適の始まり、という世の常識を私も信じ期待もしていた。周囲の事例もその通りだし、専門家も、退職により「第 3 ステージ」(図表 5)に進み、「社会的な義務から

図表5 人生30,000日の3ステージ

第1ステージ	第2ステージ	第3ステージ
7,500日(20.5年)	15,000日(41年)	7,500日(20.5年)
(子供・青年前期)	(青年後期・中高前期)	(中高年の中期・後期)
教育しつけによる社会化	社会的役割で多忙	社会的な義務から解放

出所: 関沢英彦(2005)「団塊世代の引退と消費市場」『団塊世代の定年と日本経済』日本評論社より作成

解放」されるとしている。定年イコール悠々自適を疑う人は少ない。

私本人の実体験では、定年後の悠々自

適の日課は崩れ去った。いや、私が悶々と葛藤した挙句に、崩す決断をした。なぜ、常識通りにならなかったのか考え込んだ。この回答は次の社会生活基本調査(図表 6)の活動分類の中にあった。

総務省の統計は、統計法による基幹統計調査として 1976 (昭和 51) 年より 5 年毎に、国民生活の質的向上を目指し実施されている。調査は、約 9 万世帯の約 20 万世帯員を対象に、世帯・個人の状況や活動の様子を、3 活動、20 行動に分類、把握するものである。 図表 6

図表6 「社会生活基本調査」が調査対象としている20種類の行動と3分類

	1次活動	2次活動	3次活動
概要	生理的に必要な活動	社会生活を営む上で義務的な性格の強い活動	各人が自由に使える時間における活動
行動	睡眠 身の回りの用事 食事	通勤・通学 仕事(収入を伴う仕事) 学業(学生の関連学習を含む)	移動(通勤・通学を除く) テレビ・ラジオ・新聞・雑誌 休養・くつろぎ 学習・自己啓発・訓練(学業以外) 趣味・娯楽 スポーツ ボランティア活動・社会参加活動 交際・付き合い 受診・療養 その他

出所: 総務省「社会生活基本調査」用語の解説5頁 20行動の種類 総務省HP 20161227 より作成
(注) 図中3つの矢印は筆者が挿入

中矢印 1 (筆者挿入) は、定年退職などを契機に、2 次活動の仕事から脱し、3 次に移行することを示している。図表 5 の第 2 ステージから第 3 ステージへ高進するイメージを活動・行動レベルで表現したものとみることができる。私本人

の実体験では、図表 1 左欄自適の日課に相当する。仕事を止めて、休養・学習・趣味・ボランティアなど 3 次活動に移るという常識通りの展開である。

さて、同図中の矢印 2 に着目してほしい。これは仕事から、「家事・介護/看護・育児・買い物」という 2 次活動の範囲内の移動である。2 次活動を、総務省は統計の開始時から一貫して、「社会生活を営む上で義務的な性格の強い活動」と定義している。

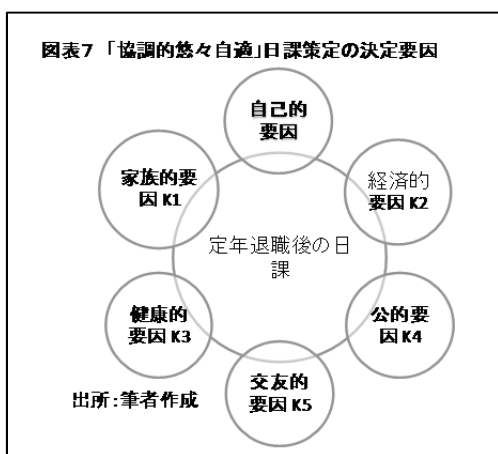
第 3 ステージ(図表 5)に向かうべく 3 次活動(図表 6)を始めようとする、果たすべき義務があるではないか、夫や父が仕事第一に行動している間、妻や子供は黙って支えてきた^{ix}、今仕事はなくなったし、過去の債務も不履行。やるべきことを終え、正常化してから悠々自適でしょう、とすることであろう。定年退職とは、そのような意味を含んでいるのである。私も 2 人の子どもの育児を妻やその実家に当たり前のように任せて単身赴任したことを覚えている。感謝と反省により、私の日課の葛藤は消えた。

自己的要因と家族的 K1 (後述) との折り合いをつける、それが筆者のいう共創的悠々自

適なのである。

3-2) 「共創的悠々自適」のすすめ

誰にも満足度の高い、協調的な定年退職後の日課をどう作れば良いかを筆者は検討、まとめたのが図表 7 である。日課決定のために考慮すべき要因は、自己的要因（自分の都合・趣味・主義）を起点として、次の K1~K5 があるというのが筆者の考えである。つまり、K1 家族的要因（家族や家庭の状況）、K2 経済的要因（家庭の財政、コスト意識）、K3 健康的要因（心身の健康）、K4 公的要因（社会保障、税金、支援）、K5 交友的要因（元職場、



繰り返すが、日課の出発点は、自己的要因であるが、これだけ、つまり自己の都合・趣味・主義などのみで悠々自適（「独創的」）に入ると、既述の通り、家族等（図 7 K1）と未調整（未共創）なので摩擦が生じるリスクが残る。もちろん、退職者個人の家族との関わりやライフ・ヒストリーなどにより、リスクの有無や大小は異なる。

繰り返すが、日課の出発点は、自己的要因であるが、これだけ、つまり自己の都合・趣味・主義などのみで悠々自適（「独創的」）に入ると、既述

の通り、家族等（図 7 K1）と未調整（未共創）なので摩擦が生じるリスクが残る。もちろん、退職者個人の家族との関わりやライフ・ヒストリーなどにより、リスクの有無や大小は異なる。

家族的要因との共創を具体的にいかなる手法で日課の調整に反映させるか。前述のアンケートに答えてくれた女性によると、自宅に吊り下げたカレンダーに自分たち夫婦の予定を書き込んでおくと、娘たちがそれを見ながら、空いた日の空いた時間にイクジイを依頼してくる。このような調整をしながら退職後の日課を作っているという。共創的悠々自適の模範例である。

介護を例に挙げると、育児と同じく退職者の家族 K1 との共創から介護が日課に入る。その上で、少なくとも介護サービス（K4）とさらに共創すると日課の満足度は一層高まる。本稿では育児（イクジイ）を軸に話を進めてきたが、介護でも、仮説は成り立つ。

3-3) 定年退職学

定年退職後の日課（共創的悠々自適）を決定する要因を本稿では 5K としたが他にないか検討しなければならないし、また各要因それぞれの内容の深堀も欠かせない。さらに個々のケース・状態により日課は十人十色である。それらに対応するため「定年退職学」なるものを確立し、研究と修得によって、1 件でも多く独創的悠々自適が補正されて、共創的悠々自適に進化されれば、退職者も周囲の人々も、より満足できる豊かな暮らしと融和がもたらされるであろう。

結びに

本報告は、筆者の実体験と周囲の少数者に限られた実証研究から得られた仮説を論じたが（やや理屈っぽくて恐縮するが）、総務省社会生活基本調査によるデータ分析や、家庭の社会的アプローチなど多くの幅広い課題が残った。その課題へのチャレンジでは、筆者が当 22 世紀研究所で掲げた研究テーマである世代間格差問題の手がかりを掴めると期待している。

本研究のお蔭で、筆者は孫の育児を感情的でなく冷静に客観視することができたのは、望外の喜びである。関係当事者には、本研究の説明をせず了解も取ってなかった点詫びなければならぬと思っている。

なお、本稿で紹介した筆者自身の実体験は、2016 年 8 月現在のものであり、12 月に入ると長女の体調回復と孫の目覚ましい成長が相まって、状況は大きく変わり、私の自適の日課であった朝のウォーキングや新聞・TV が短時間ながら復活しつつある。その新しく補正された日課こそ、本稿で言う共創的悠々自適のそれである。

-
- i 「高年齢者の雇用の安定等に関する法律」(昭和 46 年法 68 号) 第 8 条に、「…労働者の定年の定めをする場合には、当該定年は 60 歳を下回ってはならない」と規定されている。
 - ii 「イクジイ」は、ネット情報によると、2011 年頃に「イクメン」(子育てする夫のこと) から派生して使われ始め、2012 年ユーキャン新語・流行語にノミネートされた。
なお、育児とは、厚生労働省HPによると、「乳児のおむつの取り替え、乳幼児の世話や見守り、就学前の子どもの見守り、付き添い、勉強・遊びなどの相手、保護者会への出席など」を指す。
 - iii 名古屋市立大学 22 世紀研究所では、世代間格差問題を研究テーマに掲げている。また、我が国の金融経済政策、中国経済などにも従来から関心を寄せている。
 - iv 2014 年国内の医療機関で実施された体外受精は 393,745 件で、47,322 人の子どもが生まれた(日経新聞 2016 年 9 月 17 日)。単純に確率を求めると 12%になる。
 - v 孫の著しい成長ぶりで日々状況は変わるのでこれは 2016 年 8 月現在のものである。
 - vi 担当医の診断は、海馬の一時的な機能低下で、結局原因は不明とのことであった。
 - vii 昨今話題になっている、自由民主党の憲法草案で新設される第 24 条には「家族は、社会の自然かつ基礎的な単位として尊重される。家族は互いに助け合わなければならない」とあるが改憲には及ばない。
 - viii 「魔の 2 歳児」terrible twos と呼ばれているようである。
 - ix 鈴木征男氏(2005)は、団塊世代の「家事は妻の役割」に関し「意識面では性別役割分業を否定しているにもかかわらず、行動面では、やはり夫の家事協力度は低く妻がほとんど家事をやっている分業化が進んでいることが明らかになった」と言う(「団塊世代の特性—そのライフスタイル」樋口美雄他編著『団塊世代の定年と日本経済』日本評論社 61 頁)

著者連絡先 ; 田口 奉童 (Tomomi Taguchi)

名古屋市立大学 22 世紀研究所

〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1

E-mail; tomomi.taguchi1944 @ gmail.com

(使用時@前後のスペースを除去して下さい)

Published online; February 3, 2017

Invitation to “Retirement Studies”

—Toward Collaborative Leisure—

Tomomi Taguchi
Specially Appointed Professor
22nd Century Institute, Nagoya City University, Japan

Summary

Empirical researches based on self-experiment, interviews and enquetes all conducted by the author lead him to advocating a new science of “Retirement Studies”.

The author retired from work at 70 years old and started leisurely days spending time for health, relaxation, refreshment etc. as per generally accepted commonsense, but was soon mostly forced to suspend it totally in order to help his daughter nurse his granddaughter.

Through analysis of experience of his own and information on dozens of retirement cases, this paper envisages hypothesis that there might be Original Leisure (OL) of the retired in one hand and Collaborative Leisure (CL) on the other. Both are correlated as $CL=OL + 5K$, while 5K stands for 5 potential factors of decision making of leisurely daily schedule of the retired, or so long as OL is adjusted by one or some of the 5 factors it is transformed to CL, making more satisfactory to both the retired and anyone else aside.

The author draws conclusion that the further definition of 5 factors or more, information and analysis of each factor, case - by - case retirement studies, its dissemination require newly building a science of “Retirement Studies”.

(tentative translation by the author)